



「佐々木さんを支援する会」会報

# ウブムエ

事務局 〒235-0041 横浜市磯子区栗木 1-22-3 / TEL 045-774-9861  
洋光台キリスト教会内（蛭川明男牧師）／●世話人会代表 中條 智子  
●事務局長 播磨 聡（広島キリスト教会 TEL 082-293-8683）

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

## 第3回 ルワンダ「和解の現場」訪問ツアー

2019年9月2日～12日（現地3日～11日）、「佐々木さんを支援する会」主催第三回ルワンダ和解の現場・訪問ツアーがおこなわれました(前回は2016年)。全国からの参加者14名と共に、虐殺現場を訪ね、その悲劇を心に刻み、プロジェクト現場を見学しました。

皆さまのお祈りを感謝しつつ、3人の参加者の感想をご紹介します(p10以降)。



参加者：石原光夏、浦田由希子、菊地るみ子、工藤寿也、塩山二郎、嶋田健治、高橋周也  
田中優姫、平野孝雄、宮崎あい、寺尾結衣、塩山要子、米本裕見子、中條智子

### < ウブムエ47号 目次 >

- |   |                     |                     |     |
|---|---------------------|---------------------|-----|
| ◇ | 平和と和解の輪が広がることを信じて   | 佐々木和之               | P 2 |
| ◇ | 日本でぜひ学びたいこと         | ヘレン・アイネトゥ・ミカンダ      | P 6 |
| ◇ | 日本留学中に実現したいこと       | オクターブ・ガヒルウェ・カベラ     | P 7 |
| ◇ | Rwanda 留学 ふりかえり     | 高橋 董                | P 8 |
| ◇ | 第3回ルワンダ「和解の現場」訪問ツアー | 中條智子、宮崎あい、高橋周也、田中優姫 | P10 |

# 平和と和解の輪が

## 広がることを信じて

佐々木 和之

ささき かずゆき

皆さまこんにちは。日本は台風 15 号に続き台風 19 号に見舞われ、今号をお読みの皆さまの中にも被害に遭われた方々がおられるかと思えます。皆さまが一日も早く穏やかな生活に戻ることができるようお祈り申し上げます。約 3 週間後に一時帰国を控え、この原稿を書いています。今号は、9 月に実施されたルワンダ「和解の現場」訪問ツアーにご参加くださった方々が多く寄稿してくださいました。下は 10 代から上は 70 代まで、世代の異なる 14 名の方々が盛沢山のプログラムに参加してくださいました。かなりハードな日程で、その期間の走行距離はおそらく 900 キロ近くになったと思います。体調を崩されて活動を休まれる方が一人も出ないという、神様の守りの内に全てが整えられたツアーでした。参加者のお一人お一人が、活動の詳細を直接見られ、草の根の現場で癒しと和解の歩み続ける方々、そして、プロテスタント人文社会科学大学（略称 PIASS）の学生や職員と出会ってくださったことに感謝いたします。

### ■ PIASS の新年度がスタート！

10 月 11 日、PIASS の新年度が始まりました。2 年生と 3 年生の授業は既に始まっていますが、新入生の入学式は、11 月 15 日に予定されています。今年度は、ルワンダはもちろんのこと、コンゴ民主共和国、ブルンジ、南スーダン、ナイジェリア、カメルーン、ガーナ、マラウィからの受け入れが決まり、入学者数が目標の 25 名に達しそうな勢いです。一度に受入れる外国人留学生は、これまでで最多の 11 名。学費免除の奨学生 7 名の枠に、今回は 10 カ国から 50 名以上の応募があり、7 名の受け入れを決めました。その後、自費でもぜひ PIASS で学びたいという 4 名（南

スーダン、ナイジェリア、ガーナ、マラウィ出身者）の入学も決まりました。少しずつ平和・紛争研究学科の知名度と評価が高まってきているようです。昨年度、約 1 年間 PIASS で学んだ日本人女子留学生 4 名が帰国し（3 月から留学している男子学生は留学を継続）、彼女たちと入れ替わるように新しい日本人留学生 4 名が 9 月末に到着しました。全員女性です。先週ようやくそれぞれの住居が決まり、今週から授業に参加することになっています。

私が PIASS の平和・紛争研究学科を拠点にして進めている働きの目的は、ルワンダを含むアフリカ大湖地域の国々で平和を創る働きを担っていく若者たちを育成し、彼らのネットワークを拡げていくことです。今年度は、日本を含めると 12 カ国から集まってきた約 70 名の若者たちが、平和・紛争研究学科に在籍し学びを続けます。これだけ多国籍の若者たちが共に平和構築を専門的に学ぶことのできる教育機関は、少なくともアフリカの大学では PIASS だけです。この働きがアフリカ大湖地域をはるかに超えて広がってきていることを嬉しく思う一方、さらに多くの国々・地域の人々と出会っていくことの責任の大きさを感じています。

彼・彼女らが平和構築の理論と方法について共に学び、お互いに対して抱いている様々な偏見を乗り越え、友情を育み、平和を創るための協働作業に着手していけるように、これからも続けてお祈りください。また、これからもより質の高い教育と関係構築の取り組みを続けていくことができるよう、前号でアピールさせていただいた「ピースビルダー育成プロジェクト」へのご支援をどうぞよろしくお願い申し上げます。

## ■ ルワンダから日本への留学生

7月下旬、教え子のシュクルさんとロドリグさんが、東京外国語大学での10ヶ月間の留学生活を終え、ルワンダに帰国しました。日本語研修、専門科目の授業、クラブ活動、国際支援NPOでのインターン、東京にある私立高校の生徒たちとの交流、地域の市民グループの方々との交流、そして、バプテスト連盟に連なる諸教会の皆さまとの交流と、忙しい毎日を過ごしたようですが、期待を遥かに超える豊かな出会いと学びの連続だったと私に報告してくれました。二人の留生活のためにいろいろとお世話くださった東京外大関係者の皆さま、そして、様々な場で彼らをご支援くださった皆さまに感謝申し上げます。



(日本留学を終えたシュクルさん・ロドリグさん)

ロドリグさんとシュクルさんに続き、今年度も9月末、2名の学生たちを東京外大に送り出すことができました。ルワンダ人のオクターブさんとコンゴ人のヘレンさんです。今号に二人の自己紹介が掲載されていますが、既に今学期に取得する科目が決まり、月曜から金曜日まで毎日、日本語研修や専門科目の授業があるとのこと。滞在中に「日常会話は話せるようになりたい」と日本語の授業も毎日受けているということですので、彼らとお会いになられた時は、ぜひ日本語で話しかけてあげてください。12月1日に予定されている支援会主催の活動報告会にも参加してもら

う予定です。二人の日本での学びと生活を神様が導いてくださり、実りの多い留学になりますようにお祈りください。

## ■ 大学院に進学する卒業生

これまでPIASSの平和・紛争研究学科は47名の卒業生を輩出していますが、その多くはNGOや教会が進める平和構築、トラウマからの癒し、学校教育、貧困削減等の働きに仕えています。卒業生に関する最近の嬉しいニュースの一つは、奨学金を獲得し、欧米の大学院で平和構築や持続可能な発展について学ぶ者たちが増えてきたことです。現在、5名の卒業生がアメリカ、イギリス、ベルギー、スペインの大学院の修士課程で学んでいます。

PIASSに紛争・平和研究学科が創設されてから7年目になりますが、最初の数年は、自分が卒業後、海外の大学院に進学しようと考えていた学生はほとんどいなかったと思います。昨年まず2名の卒業生がその先陣を切り、今年さらに3名が続きました。そのうちの一人は、第一期の卒業生で、PIASSの「平和と開発センター」の同僚として私と共に働いてくれているセルジ・ムブニさんです。彼はこの9月から、英国コベントリー大学の通信制修士課程での学びを始めました。2年間の間に3回のみ短期の集中講義のためにイギリスで学ぶ以外は、ルワンダで仕事を続けながら通信講座を受講します。もう一人の卒業生で同僚のフロリアン・ニュンゲコさんは、来年から2年間の海外留学を実現すべく、奨学金の応募手続きを進めています。私はこれらの卒業生のうちの何人かがさらに研鑽を積み、やがてPIASS平和・紛争研究学科の教育・研究活動を担ってくれる日が来ることを祈り、待望しています。

## ■ ウムチョ・ニャンザの女性たち

「ニャンザの光」平和と生活向上プロジェクトを通してご支援いただいている、虐殺生存被害者の女性たちと虐殺加害者を配偶者に持つ女性た

ちの協働グループ、ウムチョ・ニャンザ（「ニャンザの光」）の続報をお伝えします。ジェノサイドから25年、「国民和解は90パーセントは達成された」（ルワンダ政府）とされるルワンダですが、過去の人権侵害、内戦、虐殺等によって人々が負った傷はあまりに深く、ジェノサイドの「被害者」側に位置付けられる人々と、「加害者」側に位置付けられる人々が組織的に共に働くことは、実はまだまだ珍しいことです。

昨年6月に工房をオープンし7台のミシンを購入して以来、ウムチョ・ニャンザのメンバーである14名の女性たちは、洋裁訓練を受講した後、布製のバック、ポシェット、パソコンケース等の制作に熱心に取り組んできました。その結果、以前に比べると格段に品質が良く、ルワンダのお土産屋で一般に売られている製品とは一味違った、付加価値の高い製品を作れるようになってきました。2年前に始めたブックカバー作りは、妻の佐々木恵と日本人留学生たちが週に一度、品質チェック等に取り組んだこともあり、こちらも良いものが作れるようになりました。また、自分たちで作るだけでなく、来訪者から料金をいただいて作り方を指導し、出来上がった作品を持ち帰ってもらう活動も続いています。

女性たちの関係性にも良い変化が生まれました。グループで活動を始めてからしばらくの間は、日本や他の国からの来訪者に彼女たちの活動について話をしたり、虐殺以降の歩みについて証をするのは必ずと言っていいほど、「被害者」側の女性たちでした。しかし次第に、「加害者」側の女性たちも活動について人前で話したり、証をするようになりました。以前は「加害者」側の女性たちが「被害者」側の女性たちに、遠慮がちに接していたのですが、今は、両者が打ち解けているのが見えて良く分かります。

メンバーの一人に夫が虐殺時の罪で終身刑に服しているため、6人の子どもを一人で養ってきたリベラタさんという女性がいます。彼女の夫は、メンバーである虐殺生存被害者のグラスさん

の親族を傷つけた加害者です。そのため彼女は、ウムチョ・ニャンザに加わってからかなりの期間、グラスさんに責められることを恐れていました。しかしある日、勇気を出して夫の代わりに彼女に謝罪したのです。するとグラスさんは、「あなたが悪いのではない」、とその謝罪を受け入れてくれたと言います。リベラタさんは、最近日本から来た新聞記者の取材を受け、その中で「ここではおびえないでいられる。メンバーは私のことを責めない。グループがずっと続いてほしい」（毎日新聞9月4日夕刊）と話しました。



（新留学生とウムチョ・ニャンザの女性たち）

### ■ 女性たちに訪れた転機

今年の5月、ウムチョ・ニャンザの女性たちにとって転機が訪れました。それは、皆でムランビという所にある虐殺記念施設を訪ねたことがきっかけでした。ムランビ虐殺記念施設には、ジェノサイドの当時、学校の校舎であった建物の一部屋一部屋に、石灰を吹き付けられた犠牲者の遺体がびっしりと並べられています。女性たちは追悼の思いをもってそれらの部屋を訪ねたのですが、むごたらしく惨殺されたことが見て取れる無数の遺体に大きなショックを受けたのです。訪問を終えて帰宅した後も、少なくとも5名の女性たちが、25年前の体験がフラッシュバックとして蘇り、体調を崩したり不眠症に陥りました。

その記念施設訪問で心的外傷によるストレス反応を発症し、体調を崩した女性たちの多くは、

実は「加害者」側の女性、すなわち、虐殺加害者の妻たちでした。そこから見えてきたことは、「加害者」側と見なされている女性たちの多くが、様々な事情から深く傷つきながら、それらに関する経験について十分に語り、また聴いてもらう機会を得てきていないということでした。訪問後、そのことに気づいた「被害者」側の女性たちは、平和と和解センターのセルジさんにこのように語りました。「私たちはこの25年間、様々な場で自分たちの経験を語り、また、失った家族を追悼する機会を持つことが許されてきました。しかし、彼女たちにはそのような機会が十分になかったこと、それゆえ、彼女たちが心的外傷から癒されていないことに気づきました。これからはもっと、彼女たちが自分たちの経験をシェアできる機会を持っていく必要があると思います」。

ジェノサイドを経験した「被害者」側の人々の多くは、自らが体験した凄惨な体験、そして、人によっては親族の大多数を殺害されたという巨大な喪失体験のゆえに、自分たちこそが「被害者」であることを疑いません。それはある意味当然のことだろうと思います。

さらに、ルワンダではジェノサイド以外の被害について語ることに、特に「加害者」側と位置付けられた人々の被害について語ることが、政治的にタブー視されているところがあり（『ウブムエ』35号4頁参照）、「被害者」側の人々が、いわば自分たちの敵と見なしてきた「加害者」側の人々の痛みや悲しみに気づき、共感することはとても難しいことなのです。ウムチョ・ニャンザの女性たちは、癒しと和解のセミナー等を通し、これまで何度かお互いの経験について分かち合う機会を持ってきましたが、「加害者」側の女性たちが、自分たちの痛みや悲しみを十分に語る機会が限られてきたことは否めません。

今回、ウムチョ・ニャンザの女性たちのムランビ訪問計画について聞かされた時、私はそれを止めるべきかどうか迷いました。それは、女性たちの中でショックを受け、体調を崩す人たちが出る

ことを懸念したからです。その懸念が現実になってしまったのでした。特に、メンバーの一人、アルフォンシンさんは、心的外傷後のストレス反応によりフラッシュバックや悪夢に苦しめられ、普通に日常生活を送ることが難しくなりました。彼女はニャンザにある病院で診察を受け、精神安定剤などを処方されましたが、なかなか状態は良くなりませんでした。

そのような状況にあるアルフォンシンさんを心配したウムチョ・ニャンザの女性たちは、彼女の家を頻りに訪ね、食物を差し入れするなどの支援を続けました。そして、メンバーの数名が一緒に彼女を見舞ったある日、彼女は自分がジェノサイドで父方の親族を多く殺害されたことを初めて打ち明けたのでした。彼女の話から、彼女の父はジェノサイドの標的にされたツチでしたが、親族や友人にかくまわれ、虐殺を生き延びたこと、そして、彼女自身は、フツの母親側の親族にかくまわれ、虐殺を生き延びたことが明らかになりました。女性たちが訪ねたムランビ虐殺記念施設には、父方の叔父や従姉妹の遺体が並べられていたことも分かりました。

これらのことから言えることは、彼女はジェノサイドの被害者であるということです。しかし、彼女はジェノサイドの後にフツの男性と連れ添うことになり、その男性が虐殺に加担したと告発され、裁判で有罪を宣告されて刑務所送りになりました。それから彼女は虐殺犯の妻となり、「加害者」側の人間と見なされるようになったのでした。この彼女のケースは、ジェノサイドのことだけを考えても、人々を単純に「被害者側」と「加害者側」に分けることができないことを示しています。

私は、ムランビ虐殺記念施設に並べられている犠牲者の遺体を見た女性たちが心的外傷後のストレス反応を再発する危険があることを認識していました。それにも関わらず、彼女たちの訪問計画を止めなかったことを後悔しました。アルフォンシンさんの状況がなかなか良ならず、申し

訳ないことをしたと今もその責任を感じています。しかし、その一方で、ウムチョ・ニャンザで共に働く女性たちが彼女を見舞った時、初めて彼女が自らの痛ましい経験を誰かから促されてではなく、自発的に語る事ができたことを、本当に良かったと思います。語りた、聴いて欲しいと思える信頼できる仲間を彼女は得たのです。ストレス反応再発という危機を通して女性たちに大切な気づきを与え、さらに関係を深めるための転機としてくださった神様に感謝します。

ウムチョ・ニャンザは現在、協同組合としての認可申請の準備を進めるとともに、彼女たちが育んできた和解の輪が広がっていくように、村々で証を分かち合う活動を始めています。8月には、彼女たちの男性親族と子どもたちを招き、これまでの活動の成果をお祝いする集いも開かれました。服役中の加害者を訪問する活動も続けていく予定です。彼女たちがこれからも癒しと和解の旅を共に歩いていくことができるように、また彼女たちが育んできた和解の輪が、これからも少しずつ広がっていくようにお祈りください。

### ■ 和解の現場に立ち会う

東部県キレヘ郡で虐殺被害者と加害者が共に参加する2つの養豚協同組合の人々の歩みにも寄り添い続けています。ジェノサイドで瀕死の重傷を負いながらも奇跡的に生き延びたサラビアナさんの襲撃に加わった4名の男性たちが、個人

的に謝罪する決意を固めました。今回謝罪することになった4名の加害者は、ルガンド村の養豚組合で共に働いている人々で、まだサラビアナさんに謝罪をすることができていない5名のうちの4名です。最初は5名皆が謝罪をする予定でしたが、そのうちの1名は、お連れ合いが病院で療養中という事情から、また時を改めて謝罪することになりました。今週その4名の方々がサラビアナさんの家を訪ねて謝罪をした後、来週の10月26日、彼女の親族と加害者の家族を含む、ルガンド村の人々の立ち合いのもと、謝罪の会が開かれます。私にもぜひ立ち会って欲しいとの連絡がありましたので、車で片道6時間かけてキレへに行ってきます。ジェノサイドから25年、被害者も加害者も過去に向き合う苦闘が続きます。主イエスが共にいて下さるなら、和解の奇跡が可能であると信じます。村の方々のためにお祈りください。



(平和開発センターで共に働くセルジさん、フロリアンさん)

## 日本でぜひ学びたいこと

今年9月から約1年間、東京外国語大学で学ぶ留学生。PIASSの平和・紛争研究学科の学生です。

みなさまこんにちは。ヘレン・アイネトゥ・ミカンダと申します。コンゴ民主共和国出身、4人兄弟の長女で19歳です。私は、私が生まれ育った地域と全世界の平和のために貢献できる人間

ヘレン・アイネトゥ  
・ミカンダ

に成長したいとの願いのもと、PIASSの平和・紛争研究学科で学びつつ、平和に関わる様々な活動に情熱を持って関わってきました。



私の両親は、経済的な問題に度々直面しながらも、いつも私が良い教育を受けることができるように励まし続けてくれました。また、他にも多くの方々の支援があったからこそ、今の私があると感じています。

この度、交換留学生として日本で約1年間学べることになり、この素晴らしい機会を得られたことに心を躍らせています。それは、PIASSで共に学んだ日本人の友人たちとの関わりを通して、日本の教育がとても優れたものであると感じているからです。いろいろなことを吸収したいと思い

ますが、特に日本の歴史の中でどのように平和が築かれてきたのかを学びたいです。そして、長年の内戦により深刻な暴力に晒されることが生活の一部になったコンゴ民主共和国の国民として、どのように非暴力で暴力に立ち向かうことができるのかについて、さらに学びを深めたいです。そして、ぜひ学んだことをPIASSのクラスメートやコンゴの友人たちと分かち合うつもりです。

日本での一つ一つの学びは、きっと私が故郷のコミュニティで創設した平和青年クラブ(若者が平和構築に取り組むクラブ活動)の活動に、また、私がボランティアとして関わっているNGO、コンゴ・ピースネットワークが開始した「非暴力により暴力と闘う」プロジェクトに役立つものになるでしょう。

私の留学の実現のためにご支援くださったお一人お一人に心から感謝し、「ありがとうございます」と申し上げたいと思います。私は皆さまのご支援を決して忘れません。

## 日本留学中に実現したいこと

今年9月から約1年間、東京外国語大学で学ぶ留学生。  
PIASS自然資源・環境マネジメント学科の学生です。

皆さま初めまして、東京外国語大で留学生活を始めることになりました、オクタブ・ガヒルウェ・カベラと申します。PIASSでは開発学部の自然資源・環境マネジメント学科に所属しています。PIASSでは、環境クラブやピースクラブのメンバーとして活動しています。

今回日本に留学できることになり、言葉に尽くせないほどの感謝の気持ちに満たされています。私とヘレンさんの留学実現のため、クラウド・ファンディングに参加して下さった皆さま、私たちの来日のためにご尽力くださった東京外国語大学の教職員の皆さまに心より感謝申し上げます。ぜひ皆さまお一人お一人と直接お会いしてお礼

## オクタブ・ガヒルウェ ・カベラ



の言葉をお伝えできるようにと願っています。

私は日本で学生生活を送れることにとっても興奮していますが、その一方で少し不安も覚えています。私は日本語が話せませんし、日本とルワン

ダでは文化や生活環境が大きく異なると思うからです。しかし、経験することになるであろう変化の一つ一つを受け入れていくつもりです。日本で見るもの、聞くもの一つ一つが新鮮なものばかりだと思いますが、ぜひ様々な経験をし、多くの人々と出会う一年間にしたいです。

私は日本の文化にとっても興味を持っています。日本の伝統美術、書道、庭園を直接この目で見てみたいですし、寿司、天ぷら、焼き鳥など、日本料理が食べられることをとても楽しみにしています。日本の最先端技術がどのようなものなのかも知りたいです。

日本で生活する約 1 年間にぜひ達成した目標

があります。その第一は、少なくとも日本語で日常会話ができるようになること。第二は、一生の友人を作ること。第三は、将来ルワンダの社会をより良くするために役に立つ何かを学び取ることです。

日本は、特に廃棄物処理や環境保全に関する豊富な経験を持ち、優れた政策を実施していると聞いていますから、ぜひ大学の内外でこれらのことについて学ぶ機会を持ちたいと願っています。そして、学んだことをルワンダに持ち帰り、生かしていきたいと思います。一人でも多くの皆さまとお会いできることを楽しみにしています。皆さまの上に神様の豊かな祝福をお祈りいたします。

## Rwanda 留学 ふりかえり

高橋 董

たかはし すみれ

横浜市立大学 2 年生 PIASS に 2019 年 9 月から 1 年間留学。

留学から 1 か月が経ちました。先日、1 年間一緒に留学をしていた日本人学生に再会し、不思議な気持ちと、あの 1 年がまるで長い長い夢だったかのようにも感じました。さすが 20 年間日本に住んでいた分、帰国後の順応も早く、あっという間に日常に戻ってしまったような、周りを見渡しても丘が広がる美しい風景も優しいルワンダの友達もない、幻の世界から帰ってきたような、そんな感覚です。

しかし、私にとって、この留学は初めての海外長期滞在であり、ワクワクと不安が入り混じる複雑な気持ちで、2018 年 9 月にルワンダに降り立ったことを今でも鮮明に覚えています。留学開始から、落ち着いた 1 ヶ月目頃、自分の英語のできなさや日本の友達の恋しさに毎晩泣き崩れていました。佐々木先生に隠れて日本へ帰国してしまおうと日本行きの航空券まで調べました。今思うと、なぜそんなに辛かったのか疑問ですが、当時の私は自分を強いと思い込んでいただけで、まだ

まだ弱かったのでしょう。ルワンダで沢山の経験を経て、相手のことを考えるようになり、社会のことを考えるようになり、世界のことを考えるようになり、今まで舞台上にいる自分自身にだけスポットライトを当てていたのが、舞台上に沢山の人がいることに気づくことができました。

この考えに強く影響を与えたのはマイノリティな世界に住んだことと沢山のひとと沢山のテーマについて話したことだと思います。

やはりマジョリティに属していると気づかないことが沢山あるのだなと改めて考えさせられました。日本でも、自分が女の子 1 人で男の子に交じって野球をすることで感じた男女差別や、厳しい経済状況で生活することで感じた政治への不満など。しかし、日本では“日本人”で健康体で女性で家族がいて友達がいて…という多くの部分はマジョリティでした。

そういう意味で、ルワンダでは違う観点から多くの問題に気づくことが出来ました。

そして、私の留学は一言で“話す”でした。動揺して初対面の佐々木先生から逃げるような私は、トイレの場所さえも臆病になり聞けませんでした。しかし、ネイティブ国とは違い、アフリカの人々も日本人と同じで英語が母語じゃないため、正解な英語は存在せず、みんなが必死に英語を使ってコミュニケーションをとろうという状態でした。その状況に少し助けられ、自分の英語を必死に伝えようとする思いが英語を話せない恥ずかしさよりも前に前にと出てきました。そのおかげで、授業後に気になったことを現地の学生に投げかけることができるようになりました。最後の方には議論にまで持ち込めるようになりました。そこでの現地の学生の意見は私が日本で出会ったことのないものばかりで、すごく刺激を受けました。



高橋董さん (右から二人目)

また、他の留学先と違って、日本人学生がいたことも私の留学を有意義にした一つの要因でした。母語で話すことの大切さを感じました。自分たちが考えている深いところまで意見を交換することができました。また、言語化することによって改めて自分の考えを見直すこともできます。授業で習ったことを日本の問題に応用したり、身の回りの問題に応用したりして考えを深めることもありました。プライベートでも客観的な視点からストレートに物事を伝えてくれるので、自己分析する機会にもなりました。今ではかけがえのない大切な友達で、世界の問題を共有できる数少ない友達です。これからその輪を広げて、多くの同世代がもっと気軽に世界や日本の将来の話ができるようになったら素敵だなと思っています。

PIASS で学んだ1年間は、生きてきた21年間のうちで一番濃くて密な時間でした。私の最初のルワンダへの関心は、ジェノサイドからの急激な発展と平和構築でした。なぜ20年余りでここまで治安が良く発展した国を再建できたのかというところに疑問を持ちました。そのため、PIASSで平和学を中心に学び始めたのです。私の平和学へのイメージはこの1年で大きく変わりました。どのように戦争を起こさないようにするのか、どのように戦争後平和を構築するのか、それを学ぶのだと思って通い始めたPIASS。

平和学は、私が想像するよりも様々な分野と絡み合っており、自分にとっても身近な学問でした。心のどこかで、平和学は紛争に関するものだから自分と直接的な関係はないと思ってきました。しかし、平和学は私たちの日常にも潜んでおり、心理学や社会学、経済学、自然科学などの沢山分野とも重なっています。人と人が共存するための学び、それがこの1年で私が得てきたものだと思います。その応用先が個人間の喧嘩、もしくはグループ間の戦争など異なるかもしれませんが、根本の原理は同じように思います。考えてみれば、私の人生は衝突ばかりで、この1年で上手く他人と共存していく知識を得られたように感じます。これからは、Conflictで自分の意見ばかり突き通そうとせず、だからといって逃げることもせず、上手く向き合い解決し、よりよい社会や自分自身をつくっていかれたらと思います。

また、私はこの学問を日本の道徳教育と似ているなど感じました。集団生活で生きていくための知恵だからです。ただ、ルワンダで習った平和学は宗教の教えを基盤に考えられていて、しっかりと軸があるなど感じましたが、日本の道徳教育は何を基盤に考えられているのだろうという疑問が残りました。日本政府の意向で決められている道徳教育とは、不変的なものではありません。その柔軟性が評価されつつ、偏った政治思想が反映されているのではないかという疑問も残っています。

平和学を学んだことは私の価値観や人生観に大きな影響を及ぼしたのはもちろん、ルワンダで経験したひとつひとつが私を成長させてくれたように思います。私の短い人生の中で、出会ってくれた全ての方々に感謝しています。1年前、日本からルワンダへ行く際は、日本の友達との別れがただただつらいものだと感じていました。しか

し、ルワンダから帰るときには、出会った人たちとの“別れ”をととても素敵なもののように感じました。別れの後には新しい出会いがあって、新しい自分を見つけられるようになることを知っているからです。

これからの人生、どれだけの人に出会えて、どれだけのかげがえのない人たちができるか楽しみで仕方ありません。

## 第3回 ルワンダ「和解の現場」訪問ツアー

報告者 世話人代表・中條智子

支援会主催としては3回目となる今回のツアーも、これまで15年にわたる佐々木さんのルワンダでの活動現場を訪ね、和解と平和に生きる方たちとの出会いをいただく豊かな旅となりました。とくに今回は、ネットで佐々木さんの活動やツアーを知った人や、平和構築や国際交流、社会貢献に関心をもつ人など、バプテスト以外やキリスト者ではない参加者も複数あり、また年齢にも幅があり、多様性に富んだ顔ぶれでした。しかし、現地ですさまざまな出会いを共有する中で心を開いて語り合い、お互いへの理解が深められて、大変よい仲間となることができましたと思います。

佐々木さんのかつての教え子で今は同僚として働くセルジさんやフロリアンさん、また PIASS に留学中の吉田望さん、宮原遼子さんはじめ、PIASS の学生・元学生のみなさんが同行して、ともに学び、かつツアーを助けてくださいました。もちろん、証言をしてくださったフィロメンさんやアグネスさん、ウムチョ・ニャンザの方たち、PIASS の教職員の方たちとピースクラブの学生たち、養豚組合の方たち、バスドライバーのジアジさんなど、多くの方がたのお世話になりました。何より、佐々木さんと恵さんが、ツアーの生活面だけではなく、深いところで参加者をフォローし語り合いを導いてくださったからこそ、参加者は元気に過ごせたのだと思います。心から感謝をいたします。

ルワンダは毎年7パーセントもの経済成長をし、キガリの街には高層ビルが建つなど、発展を続けています。郊外には外国資本の看板が立ち並んでおり、さらに変化をしていくことでしょう。そうした中で、こどもたちや青年たちが、表面的な豊かさに心を向けるのではなく、真実に平和を造り出す人として成長することを志して欲しいと思います。大虐殺から25年を生きてきたおとなたちの言葉は、どれも重いものです。多くの葛藤の中で、謝罪する勇気と赦す決断に生きるからこそ、語り得る言葉があります。そうした言葉を、深い敬意をもって聞くことを通して、日本に暮らすわたしたち自身もまた平和を造り出す者へと変えられ、整えられていきたいと願わされました。

支援会の皆さまには、ツアーの実施にあたってお祈りをありがとうございました。今回も、支援会特別会計から、学生の参加者に各5万円の参加費補助をさせていただきました。感謝いたします。

実際に身を置くことで、何気ない日常の様子や生活、そこにある緊張感など、想像ではわからないことを感じることができました。また、ルワンダで出会った多くの人の言葉から、佐々木さんの働きが受け入れられ喜ばれ、信頼されていることを知り、支援し続けることの責任も改めて強く覚えたツアーでした。

### ＜旅の日程＞

- 9/2 (月) 羽田空港集合、出発前オリエンテーション 9/3 (火) 0:01 羽田空港発 15:10 キガリ着  
 9/4 (水) 国連平和維持部隊記念施設訪問、ギソジ虐殺記念資料館見学、  
 ニヤマタ虐殺記念施設 (カトリック教会跡) 訪問、生存被害者 (フィロメンさん) の証言  
 9/5 (木) フィエへ移動 PIASS 教職員との交流、キャンパスツアー (図書館、寮 見学)、  
 フィエ市街見学 (カトリック教会、カフェ)、PIASS 学生 (ピースクラブ) との交流  
 9/6 (金) ニャンザへ移動 ウムチョ・ニャンザとの交流、ブックカバー作り体験、ルワマガナへ移動  
 9/7 (土) キレへへ移動 ルガンド村養豚組合関係者と交流、グループで関係者宅訪問・証言聞き取り  
 9/8 (日) 日曜礼拝 (カトリック教会・関係者が多く出席) カヴゾ村養豚組合訪問 ガヒニへ移動  
 OP・ガヒニ聖公会教会訪問 (東アフリカのリバイバルの教会)  
 9/9 (月) アカゲラ国立公園縦断ドライブ (野生動物観察) キガリへ移動  
 9/10 (火) OP・キガリ市街見学、キミロンホ・マーケットツアー、虐殺生存被害者アグネスさんの証言  
 9/11 (水) ツアーのまとめ 16:20 キガリ・発  
 9/12 (木) 18:40 成田空港・着 解散

OP : オプションプログラム

## 和解の現場訪問ツアーに参加して

明治学院大学 心理学部 2年

みやざき  
宮崎 あい

まず初めに、このツアーを通してたくさんの学びができたこと、そして健康が守られたこと、何よりも神様の偉大な働きとご計画を目に出来たこと感謝します。

今回のツアーはほとんどバスでの移動でしたが、その移動中に窓の外を見ていると、そこには神様が創られた美しい世界が広がっていました。緑の丘が美しく、人の流れは穏やかに見えました。ルワンダではあまり日本人を見ることがないのか、たくさんの方がこちらに向かって手を振ってくれました。鮮やかな自然に囲まれ、まさにルワンダの国旗の色そのものの世界がそこには広がっていました。凡そこの地で 25 年前にジェノサイドという、ひどく恐ろしい出来事があったとは想像もできませんでした。私は、本当にこんなに穏やかな地で虐殺があったとは信じられませんでした。でも、間違いなくルワンダでは隣人同士



(写真：宮崎あいさん (右端) と子どもたち)

の殺し合い、凄惨な死の現実があったのです。

キガリの虐殺記念館では沢山の頭蓋が展示されているのを目にしました。「レプリカではないのか」と思うってしまうほどの数でした。「信じたくない」それが正直な感想でした。

一番最初にお会いしたサバイバーはフィロメ

ンさんでした。フィロメンさんの表情は硬く、当時あったことをただ、淡々と語っていました。本当に恐ろしい話ばかりでした。私は「どうして神様はこんなことをしたのか？」それしか考えられませんでした。でも、フィロメンさんは変わらぬ表情で「今神様に生かされている」と仰っていました。本当に平和の中で生活してきた日本人には想像を絶するほどの痛みや苦しみを経験しているはずなのに、そう語れるということは、本当に強く、神様を見ているから、神様の計画を信じているからこそだと思いました。揺るがない土台があることを感じました。

ウムチョ・ニャンザでは初めて加害者家族のお話を聞きました。私はジェノサイドのことを知って、ウムチョ・ニャンザに行くまでの間、「傷つき、苦しんでいるのは被害者の方々なのだろうな」と思っていました。でも、実際に加害者家族の方のお話を聞いて、ジェノサイドを経験した全ての人がそれぞれに違う悩みや苦しみを抱えていることを知りました。「復讐されるのではないか」、「自分や家族は赦されるのか」、そんな苦悩を抱えていることが分かりました。このことはルワンダでの出会いがなければきっと、知らずにいたと思います。今回のツアーに参加できて本当によかったと思いました。

ルガンド村では神様の奇跡を見ました。虐殺被害者と加害者が共に働き、共に祈り、賛美を捧げ

ているのです。25年前、こうして人々が共に暮らしていくことを誰が予想できたでしょうか。きっと神様だけです。子どもも大人もとても楽しそうに、喜びながらダンスをしていました。私の心もすごく平安に満たされました。神様がこのことを25年前かそれよりもっと前から分かりませんがご計画されていたかと思うと、本当に神様は人知を超えたとんでもないお方だと改めて思われました。ルガンド村にはたくさん子どもたちがいました。この子どもたちの笑顔を絶対に絶やしてはいけません。そのために多くの人が自分と、また隣人と葛藤しています。この葛藤を続けることでいつか平和が実現すると思いました。

「涙と共に種を蒔く人は 喜びの歌と共に刈り入れる」 詩編 126 編 5 節

これは私が好きな御言葉です。ルワンダの人はこの25年間多くの涙を流してきたと思います。これからもたくさんの涙があると思います。でも、少しずつ喜びの歌が溢れてくるとも思います。ルワンダでの本当の平和実現はまだまだもっと先のことも分かりません。でも神様はきっとこの地を喜びの歌で満たしてくださいと私は確信しています。そのためにも、今、平和実現のために最前線で働かれている佐々木先生ご夫妻のために、またルワンダの人たちのために祈り続けていきたいです。

## 思いがけないルワンダ土産！

西南学院大学大学院神学研究科 1年

たかはし ひろや  
高橋 周也

キガリに到着した私は、宿舎に向かう車窓から見える人の明るさや街の賑わいに戸惑っていた。この戸惑いがどこから来るものなのか、その時にはよくわからなかった。

本当にたくさんの方々に出会った。被害者の方々、加害者側の方々、子どもたち……。無数

の遺骨に、おびただしい数の血が付いて破けた衣服などの遺留品。生きている人もそうだが、今は物を言えなくされたたくさんの方々への存在は、そのあまりの静寂さが、却って圧倒的な迫力となって迫ってきた。私は、壁に打ちつけられ、切断され、残虐に殺されていった子どもたちと同世代で

ある。幼稚園時代の私と同じように、好きな遊びがあって、お気に入りのおもちゃがあって、将来の夢があった。これも計算してみれば当たり前の事実なのだが、リアルな現実となったことだった。生きていたら友達になれたらだろうか。母親であった被害者の女性たちに、思わず Thank you, Mom と言いたくなった。

やはり同世代である PIASS の学生たちとの交わりも楽しかった。あの美しい劇はぜひ、教案として日本に持ち帰りたい！学校とは何てよい場所なのだろう。同時に、人の顔が見えるようになればなるほど、「過去の凄惨な歴史」は、今の自分たちが生きるこの世界につながるものと感じられ、恐ろしくなった。

正直なところ、ツアーのごく初期には、誰かと話すのにしんどさを覚えるほど、疲れ切ってしまった日があった。そんな時、いつもバスから見える窓の外の景色とツアーメンバーたちとの交わりに心癒された。ルワンダの車窓はいつも赤い大地と緑の丘！この日本では決して見ることでできない風景は常に、この場所の空気をもっともっと吸い込みたいという気持ちにさせてくれた。そして、その風を他の参加者たちと一緒に感じ、分かち合うことで、出会いは一層深められ、広がり、耕されていった。たくさん楽しい話もした。旅の仲間に感謝の思いでいっぱいである。

ルワンダで学んだことで一番大きかったことは、「真剣さ」だった。誰の目も力強い。そこには、赦そう、愛そうという「決断」がある。経済的にも身体的にも、そして家族も財産も、何もかも奪われた人たちに残されたもの……。その人たちの発する「私にできることはゆるすことだけ」という言葉は、ずっしりと重かった。それは、旅に出る前の私がイメージしていたような美談とか奇跡などではない。

例えばこんなことがあった。養豚組合への訪問では、被害者のひとりであるサラビアナさんと出会った。指と腰は曲がり、今でも痛みと、頬に大きな傷跡が残っている。その村で、加害者も被害



(写真：高橋周也さん（右から二人目）)

者も一緒になってダンスをした。始まるや否や、現地の牧師が真っ先に私の手を引っ張ってくださって、なんと私たちも踊りの輪の中へ加わった。とても楽しく嬉しい時だった。ところがその午後、彼女のお宅を訪問して聞いたのは、彼女は後遺症のせいで体調が悪化するために、ああいう音の鳴り響く場にはいられないのだということだった。何と現実は厳しいことか！手放して喜べない。やはり悲しみは続いている。これは私の中で、象徴的な出来事として記憶に残ることとなった。

現実にある痛みは消えないが、彼らは皆、自分の人生に起こったことを、本当に真正面から受け止めて大切にしていた。ゆるしも、今を生きることも、その上での決断なのである。それに比べ、私はなんと生ぬるい人間であることか！

実を言うと、それを見透かされるような気がして、ずっと、現地の方々やツアーメンバーの目を見るのが怖かった。けれど、人生で初めて蚊帳の中で眠る毎日を過ごす中で、いつも神様のご愛に包まれているのだから、安心して、しっかり私も自分に向き合い、私も私なりの痛みを抱えた者として、それがあから何かを与えられるという者として、生きていってよいのだと力をいただいた。ここに本当に前を向いて生きる力がある。出会ってくださった方々、佐々木さんのお働きに感謝します。

## 25 年後のルワンダで

国際基督教大学大学院修士課程

たなか ゆうき  
田中 優姫



(写真：写真中央 田中優姫さん)

和解とは何か。これだけ多くの戦争や紛争が繰り返され、平和構築が学問として確立してからも「和解」に対する統一された理解や定義は未だなされていない。しかし、紛争後の社会では、争いを繰り返さないために「正義」に基づいた「和解」が求められる。ルワンダにおいて、この和解は国家主導で行われ、「ルワンダ人としてのアイデンティティを再定義し、共有されるルワンダ人としての感覚を作り上げていくことが、ルワンダにおける和解の核である」と認識された。だからこそ、赦しやその後の和解を重視するガチャチャ裁判が行われ、政府は、加害者が被害者に赦しを求め、求められた被害者は加害者を赦すよう求めた。今回のスタディー・ツアーで、個人レベルの和解の現場を訪問させていただき、その難しさ、課題と希望を見せていただいた。本稿では私にとって特に印象的であったこと学ばされたことを大きく三つに分けて記したい。

まず、一つ目はルガンド村でのフィールドワークである。私はジェノサイドの加害者であったアンドレさんから話を伺った。私は彼の話聞くまで、ルワンダの和解において、より重荷を背負わされているのは被害者であるという意識がぬぐえなかった。しかし彼の話を聞いて、深いレベルの和解を達成するためには、加害者の側にも相当な自覚と覚悟が求められることに

気づかされた。私がアンドレさんに「あなたにとっての和解とは何か」を尋ねると彼は「和解とはプロセスである。」と答えた。彼は、被害者であるサラピアナさんが、今後もジェノサイドの様々な後遺症に悩まされることも、赦したことを後悔することがあることもきちんと理解していた。そして、だからこそアンドレさんは自分ができることがあれば彼女を手伝い、今なお、赦してもらい、和解していく過程にあるのだと話してくれた。自分の罪を認めることは、その罪が重ければ重いほど耐え難く、それを自覚して犠牲者と向き合い、贖罪しながら生きていくことはどれほど難しいことか。和解の難しさを実感するとともに、その営みを体現している方々がいらっしやることに希望と人の素晴らしさを感じた。

二つ目は、ルワンダでの和解においてキリスト教が果たした役割が、自分が思っていた以上に大きかったことである。知識として、ルワンダの人口の多くがキリスト教徒であること、和解に関し教会が重要な役割を果たしたことは知っていたが、個人レベルで和解に進むため、和解を受け入れるため、自分の罪を自覚するためにキリスト教が果たす役割がかなり大きいことは私にとってとても興味深かった。佐々木先生が実際に行ったhealing セミナーの一例として、自分の苦しみを書いた紙を十字架に括り付けて燃やし、イエス様に苦しみを肩代わりしていただくといったものがあったり、REACH の活動でなぜ和解が終わってないのかを説明するため、詩編を用いたりすることが、ルワンダにおいて被害者と加害者が具体的に自分の問題について理解し、受け入れるために必要であった。一方で、単に宗教的理念を押し付けるだけでは、それは和解にはつながらない。ウムチョ・ニャンザで被害者女性が、教会による和解に関するお話で、赦しを求められたら

赦さなければならないと言われ、それが出来ずにずっと苦しんでいたと話してくれた。そうした宗教の危険性について留意しつつも、和解における宗教の役割は今後も考慮してくべきだ。

最後に、スタディー・ツアーでの個人的な反省として、きちんと現地の方と向き合えていなかったことをあげたい。私は長年平和構築の現場で働きたいと考えており、だからこそルワンダのジェノサイド後の和解について書くと決めた際も、実際に現地に行くことを強く望んだ。しかし、実際に現地で短い間とはいえ当事者と向き合い、話をさせていただく際、彼ら、彼女らを実際の生身の人間としてきちんと接することが出

来なかったように思う。彼らは単なる紙面上の人ではなく、ジェノサイドは実際に起きたことであり、ルワンダにおける和解は実際に彼ら・彼女らが苦しみ傷つきながら、徐々に築きあげていったものである。今後平和構築やそうした現場に関わりたいと思うのであれば、それが人の営みであるということを忘れずにいたいと感じた。

今回のスタディー・ツアーでは感じたこと、学ばせていただいたことが本当に多く、参加させていただいた支援する会の皆様方、ご一緒させていただいたメンバーの方、ツアーのマネージメントをしてくださった佐々木教授ご夫妻には感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。

## ツアーでの出会い



(虐殺生存被害者フィロメンさんのお話を聴く)



(キレヘ・ルガンド村の皆さんとの交わり)



(日曜日キレヘでの礼拝後子どもたちと)



(ツアー参加者・食卓を囲んで)

## 事務局からのお知らせ

- 今回の号は、諸事情により、夏・秋合併号となりました。
- 支援会主催で、9月2～12日、第3回ルワンダ「和解の現場」訪問ツアーが実施されました。14名参加。
- 今年の佐々木和之さんの帰国は、11月9日～12月9日の一か月です。報告集会にご参加ください。

## ● 昨年に続き、PIASS 開発学部学生 2 名、東京外国語大学に留学！

東京外国語大学（現代アフリカ地域研究センター）に、PIASS 開発学部より2名の学生（平和・紛争研究学科1名、自然資源・環境マネジメント学科1名）が、9月から約一年間留学しています。諸教会・諸団体におかれましては、留学生から話を聞く機会の提供などをご検討ください。

## ◇東京外国語大学ルワンダ留学生交流会 2019 11月28日(金)17:00-19:30

二人の留学生とクラウド・ファンディング協力者などとの交流のため行われます。第一部はヘレンさん、オクタブさんの大学生活の紹介など、第二部、懇談会です。会場は、東京外国語大学府中キャンパス（第一部＝研究講義棟 107 教室、第二部＝アゴラ・グローバル 1 階カフェスペース）。参加費無料。11月15日(金)までにホームページ “ <https://forms.gle/JXgVzsFzLQTjeNf77> ” でお申し込みください。

## 帰国報告集会 2019 のご案内

### 支援会主催 報告集会 in 埼玉

2019年12月1日(日) 18:30-20:00 会場：日本バプテスト浦和キリスト教会  
さいたま市浦和区常盤 7-2-14 牧師 廣島 尚 問い合わせは事務局(045-774-9861)へ

### ● 新設「ピースビルダー育成プロジェクト」への寄付をお願いします！

支援会では、佐々木さんが取り組む“平和構築を将来担う若者を育成する活動”に、皆様の支援金を用いてきました。しかし、支援会や積立金が減少する中で、このための支出が困難になってきました。そこで、この活動を継続するために、「ピースビルダー育成プロジェクト」への寄付をお願いすることにいたしました。内訳は、PIASS で学ぶ学生への奨学金 60 万円、PIASS ピースクラブ活動費 20 万円、日本に留学する留学生への学習支援 20 万円の計 100 万円です。振替用紙に「育成支援」と明記してお送りください。ぜひ、よろしく願いいたします。

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 佐々木さんを支援する会HP（ホームページ）

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。HPから入会手続きも可能です。佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 中條智子（長住教会牧師）、加藤 誠（大井教会牧師）、播磨 聡（広島教会牧師）、蛭川明男（洋光台教会牧師）、米本裕見子（日本バプテスト女性連合幹事）